

6月17日 月曜日

発行所 日本経済新聞 東京本社 ④(03)3270-02 100-8066 東京都千代田区大手町1-1 大阪本社 ④(06)6943-71 名古屋支社 ④(052)243-33 西部支社 ④(092)473-32 札幌支社 ④(011)281-32



www.nikkeikin.co.jp

購読のお申し込み

☎ 0120-21-4946 http://www.nikkei4946.com/

日経電子版

http://www.nikkei.com/ お問い合わせ(7:00~21:00) ☎ 0120-24-2146

200年企業

□ 216

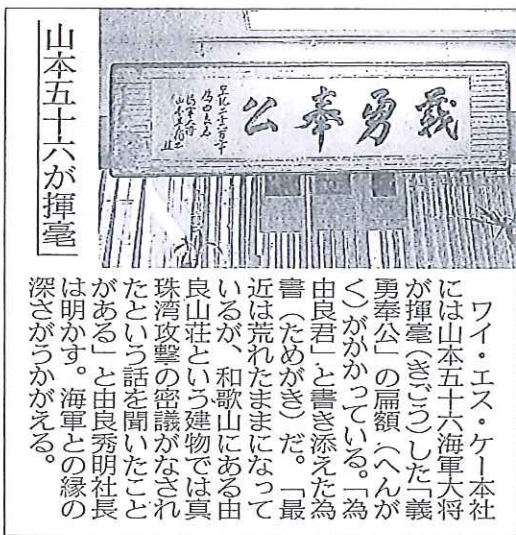
—成長と持続の条件

1914年、第1次世界大戦勃発でドイツからの合成染料輸入が途絶えた日本の染色業界は恐慌を来した。和歌山市で染色会社を経営していた由良浅次郎氏は、周囲の反対を押し切って染料のもとになるアニリンの合成実験に着手。わずか1カ月余で成功した。実験材料のベンゼンは大阪・道修町の薬問屋街で手当てできたが、次は月産2ト規模の製造装置が目標。石炭を乾留してガス成分を抽出した副産物として粗製ベンゼンが東京ガスにあると聞くと、乗り込んで260トを購入した。

東ガスの技師は「純度が低くて化学原料に使えない」と言ったが、「精製する」とだけ告げて引き取った。「ドイツ以外では製作工(現本州化学工業)を設

名伯楽、化学工業の礎

ワイ・エス・ケー、原料国産化



山本五十六が揮毫

ワイ・エス・ケー本社には山本五十六海軍大将が揮毫(きこう)した「義勇奉公」の扁額(へんがく)がかかっている。「為由良君」と書き添えた為書(ためがき)だ。「最近荒れたままになって

立した。アニリンやフェノールの工業生産も実現した。ベンゼン精留塔は本州化学和歌山工場(和歌山市)に現存する。17年には染料製造子会社

の由良染料(ワイ・エス・ケーの前身)を設立、24年に岡山県玉野市で「下瀬火薬」の製造を開始した。火薬の成分はピクリン酸。染料の基礎原料、フェノール

からつくり出せた。下瀬火薬は爆発力が強く、日露戦争ではロシアの黒色火薬を圧倒して戦争を勝利に導いた。その後の増産で一翼を担い、第2次大戦終結まで供給を続けた。

由良家は1735年創業の紀州藩御用商人「日高屋」が起源で、歴代が藍染めを営んだ。紀州徳川家は綿花栽培を奨励した。木綿を起毛した「紀州フランネル」という生地が1871年に開発されると、浅次郎氏の父、由良儀兵衛氏はネル事業に参入する。

「(50年の)ジェーン台風の影響や業績不振で由良精工は曾祖父の手元を離れ、本州化学になった」と由良社長は語る。和歌山に有機化学の会社が多いのは(編集委員 竹田忍)

由良家は1735年創業の紀州藩御用商人「日高屋」が起源で、歴代が藍染めを営んだ。紀州徳川家は綿花栽培を奨励した。木綿を起毛した「紀州フランネル」という生地が1871年に開発されると、浅次郎氏の父、由良儀兵衛氏はネル事業に参入する。

「(50年の)ジェーン台風の影響や業績不振で由良精工は曾祖父の手元を離れ、本州化学になった」と由良社長は語る。和歌山に有機化学の会社が多いのは(編集委員 竹田忍)

浅次郎氏の存在と無縁ではなかった。染色も手がけた。このた菅井越夫氏、日本触媒の創業者の八谷泰造氏は由良精工から巣立った。八谷氏は1964年に亡くなった浅次郎氏の追悼文で、「入社した9月1日から1日も休まず毎日、朝6時から夕方6時まで働き、11月3日に初めて休暇をもらった」と書き、「おかげで二十数年の社長8時出勤が苦痛でない」と結んだ。菅井氏は浅次郎氏が61年に藍綬褒章を受章した際に、「世間ではイバラの垣に登るか由良で辛抱するか、と言われるほど鍛えられたが、その下で進取の気性を培った」とあいつし